
雨に關わるある光景

ムネクニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨に関わるある光景

【Zマーク】

Z30900

【作者名】

ムネクニ

【あらすじ】

雨上がりの通学路を、列を成して歩く子供達。

彼らは潰れたカタツムリと、その隣に落ちている小人を見つけて足を止めた。

「依子、あんた触つてみなさいよ

雨上がりの通学路を歩く子供達がいる。

先ほどまで子供らしい陽気さではしゃいでいた彼らは、今一様に足を止めていた。

複数の視線の先には、潰れたカタツムリの残骸がある。しかしそれだけならばよくあること。「氣持悪い」の一言で素つ氣無く通り過ぎたはずだった。

いつもと違うのは、どろどろしたやわらかいものと粉々になつた殻の隣に、小さな人間が倒れていたことである。

彼らの小さな親指くらいの大きさのその人物は、倒れたまま一向に目を開ける気配はない。

「ねえ、これって人間」

普段自分から話し出すことの滅多にない依子が口を開けば、眼鏡を押し上げながら一斗が答える。

「いや、こんなサイズの人間がいるわけないよ。そんなこと、ビックリの本にも書いてなかつたし、大人だって言つてなかつたもの」

「いや、でもこれ動いてるぜ」

すぐに筆記用具を壊し乱暴者と呼ばれる一方で大の虫嫌いの佑太は、目線にカタツムリを入れないよう必死になつて言った。

確かに見れば、その人間の胸は定期的に上下しているようだつた。仰向けになっているため、その動きは小さくとも非常にわかりやすいものだ。

それまで黙つて様子を観察していた君江は偉そうに言ひ。二人はこの君江という女子には逆らえない。幼馴染という互いに知り抜いた間柄にとつて、力関係は絶対のものであつた。嫌がるそぶりを見せる依子に気付きながらも、一斗と佑太は助け舟を出すことが出来ず、ただ見守るばかりである。嫌だよう、あんた言ひこと聞けないの、だつて。

しぶつては見せても結局最後は君江の言つ通りになつてしまつ。やの事実をわかつていながら尚も拒否を続けるのは、依子の心のうちには、やりとりの間に対象が消えてしまえばいいという目論見があつたからだ。しかし、そんな願いも空しく、小さな人は呼吸活動を除いて、全く動く気配を見せなかつた。

「こ」の前お母さんの化粧品勝手にとつてきたりと、言いつけりやう

から」

「だつてあれは君江ちゃんが」

「あ。そんなこと言つていいの」

あくまで君江は強硬な姿勢を崩さない。一斗と佑太はなんともいえない氣まずさを感じていたが、やはり君江には逆らえなかつた。

「……わかつた」

「ふうん」

依子が一つの長いお下げを揺らして頷くと、君江は満足そつな顔で一步後ずさつた。

「ちよつと君江ちゃん、今なんで後ろに下がつたんだい」「やっぱ怖くなつたのかよ。じゃあ、やめよつぜこんなの」「馬鹿ね。怖くなんかないわよ。でも被害が及んだら嫌じやない。

相手が人間だつたら言葉も喋るし頭脳もあるのよ。見た目どおり大人なんだつたら私達より頭いいかもしないし、用心に越したことはないじゃない

「そんな」

君江の言葉により一層恐怖心を搔き立てられた依子は、いよいよ泣きそうになっていた。助けを求めて一斗と佑太を見れば、一人はそれぞれ明後日の方向を見て視線を反らした。

なんなの、君江ちゃんて。

その瞬間、依子は今まで感じたことのないドロドロしたものが自分の中で生まれるのを感じた。

すうっと胸が冷たくなる。この田に映る世界の温度が若干下がったようを感じた。

一斗君も佑太君も、助けてくれるつて前言つてたのに。

「ちょっと、何固まつてんのよ。早くしなさいよ」

多少の距離を持つた声がかかる。いつの間にか依子だけでなく一斗と佑太も、遠巻きに彼女を見つめていた。

その事実に気付いた途端、なんだか目の前の死骸も小さな人間もうでもよくなってきた。

気持ち悪かった。怖かった。不気味だった。

でもそんなの、あの人達よりもだわ。

軽くなつたような重くなつたような妙な気持ちで手を伸ばした。その瞬間、

「あつ」

人が、目を開けた。

彼は気がつくとあたりをきょろきょろ見回した。そして、すぐ隣の

カタツムリの残骸に気付いたようだつた。

立ち上がり、パンパンとズボンの尻をはたいたその人間は、依子を気にする様子もなく、残骸へと近づいていった。

何をするのかと見守る彼らの前で、その人間は悠々と殻を再構築していった。

軟体部が潰れてできた粘性の高い液体を使って、殻の破片を迅速に繋ぎ合わせていく。あつという間にそこには見慣れた「カタツムリの殻」が登場した。ただし、中身は勿論ない。

そこで人はいつたん考えたようだつた。何故そう思ったのかといえば、彼は腕を組んで下を向いたのである。

当然のことながら、距離をとっている君江たちにはそれが見えなかつたらしく、当たり前のように依子への命令が飛んできた。

「なんか止まつたけど、そいつ、どうなつたのよ」

教えなさいよ、と続けたかったのだろうと思う。しかし、依子がその不快な言葉を聞くことはなかつた。

それまで周囲など氣にも止めていない様子だった小人は、声がするなりその方向へと顔を向けた。その顔は、獲物を見つけた狩人のようく薄暗い笑みをたたえていた。

小人が腕を解き、君江に右手の人指し指を向けると、彼女はぐわつと歪み、小さく小さくなつていった。

皮膚はぐにゅぐにゅに弛み、途中で目の玉が転がり落ちた。体の内側から絞りとられた水分が外側へと露出し、その有り様はまるでナメクジの如くとなつた。

「ひいいいいいいいいいい」

その姿を見て佑太は絶叫した。

はつと氣付いたように小人の視線が佑太へと向けられる。先ほどとは違つて面倒そうな顔をした小人は、今度はだるそうに指を向けた。しゅるしゅるしゅると、人の体が縮んでいく。依子の視線の先、一斗の右隣には、今や一体のナメクジが出現していた。

小人は修復した殻を腋に抱え、地面を這いする一体の生物へと近づいて行つた。

殻を地面に置き、空いた両手でひょいと一体を抱える。そのまま殻の入り口へと無理矢理押し込むと、そこには双頭のカタツムリが誕生していた。

小人が殻を横から蹴ると、それは酷く不器用に這いだした。体がもつれるのか止まつては蹴られ、蹴られては動きを繰り返し、それらは依子の前から姿を消した。

ふと気がついて一斗を見れば、彼は立つたまま気絶していた。色の濃くなつているズボンの股座と地面を湿らすものを見て、依子はにこりと笑つた。

「 麻美。駄目よ、ほり」

公園で遊ぶ親子、という時に微笑ましい光景がそこにある。しかし翳つた空と湿つた空気は、雨の訪れを予感していた。

「はーい」

元気よく返事をして、子供は木の枝を手放した。先ほどまでコンクリートに貼りつくカタツムリを突いていたものだ。

「依子は優しいな」

「またからかつて」

「虫に対してだけな」

「他に優しくないみたいじゃない」

俺には優しくないぞ、そういうて夫は悪戯っぽく笑う。

「もう。だって、潰しでもしたら大変だもの」

いじめるのは別にいいんだけど。

「ん。何か言ったか」

「何でもないわよ」

依子はにこりと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3090o/>

雨に関わるある光景

2010年10月15日23時19分発行